

『考えることが苦手な言語聴覚士 なんでもできる環境でなんでもやる!』

## 要約

アクティブ初の新卒 ST 山川潤（松原）、入職 4 年目。養成校時代の実習不合格、留年という挫折経験から何を学んだか。失語症漫才をきっかけにして後輩ができた今の想いは？

「おばあが大好きだったので、高齢者と関わる仕事がいいと思って」。言語聴覚士に就いた理由を聞くと、山川潤はふるさと沖縄の訛りを残しながらそう答えた。

養成校の実習で挫折を経験した。徹夜してもレポートが書けない。「実は考えることが苦手。作文は最悪、小中高と出したことはありません」。指導者に何を質問していいかもわからなかった。落第し留年が決まる。気持ちが続かず、休学を選んだ。

休学中、愛知県の自動車工場で働いた。初めての一人暮らし。無心で働き、仲間と遊んだ。この半年間が人生で一番楽しかったと振り返る。流れ作業は考える必要がなく楽だったが、一度自分のミスでラインを止め、それが他のラインにも影響を及ぼした。働く責任を感じたという。

復学後、再実習ではレポートが書け、質問もできるようになった。「一度目の実習は学生気分でした。どうすればよりよい結果が得られるのか、働くことへの意識が変わった」と理由を語る。実習先の病院から就職を誘われたが、次の実習で訪問を経験。病院より訪問で必要とされていると感じ、訪問の道を選んだ。

入職 4 年目、今の職場を「なんでもできる環境」と話す。リハビリテーション、先輩への相談ができ、活動参加への関わりや学会発表も望んで挑戦した。活動参加の 1 つとして、失語症者の森氏と漫才コンビを組み、依頼に応じ、全国へ飛ぶ。

今年度、母校での山川の漫才と講義をきっかけに後輩が入職。山川はアドバイザーを担う。「僕の 1 年目はひどかったと思う。自分の 1 年目を思い出します」。まだ自分からどこまで働きかけようか迷っている。今は聞かれたことに答える程度にしているそうだ。「後輩の緊張がなくなるまではゆっくり行こうと思っています。訪問同行してちょっとずつ質問が出てきたらいいかな」。今でこそ、変わったが自分も最初は先輩に質問が全くできなかったことを振り

返っての、指導方法のようであった

今、言語聴覚士としての自分をどう見ているのか。「考えることは今でも苦手です。何気なく考えられない。よし考えるぞと姿勢を作らないと」。でも、考え抜いた練習で、ことばが出にくい失語症の利用者さんからスムーズにことばが引き出せたとき、やりがいを感じると話す。

今後についてたずねると「むいているのは工場、考えなくていいですし。でもずっと言語聴覚士はやっていきたい、やっぱり楽しいのかな。それでもいつかはおばあとお仕事しているかも」とはにかんだ。